（様式２）

令和5年度〔 自己評価報告書 〕

学校番号	学 校 名	校 長 名
9	川崎市立 渡田小学校	楠田 典子

学 校 教 育 目 標	今年度の重点目標
○ 目標に向かい、自分で考え進んで行動する子≪やる気いっぱい≫ ○ 思いやりのある豊かな心で接することができる子≪笑顔いっぱい≫ ○ 自分を振り返り、明るく健康な生活をおくれる子≪元気いっぱい≫	○児童が学ぶことを楽しいと感じることができる授業づくりを行う。 ○地域の教育力や学習環境を積極的に活用した学習活動を推進する。 ○学校が、児童が安心して過ごすことができる場所になるための取組を推進する。 ○PTA、町内会、地域教育会議、地域の寺子屋などとの連携を図り、充実した教育活動の推進を図る。

評 価 項 目		具 体 的 な 取 組	成 果 と 課 題	具 体 的 な 改 善 策
1	分かる楽しい授業	校内研究では本校の児童が苦手と感じている算数を取り上げた。児童が「分かった」と実感を持てるような授業づくりのために、学年の教員が協力して教材研究を行ったり、児童が算数に親しみを持てるような環境整備を行ったりした。	自分の考えをもつことや考えたことを伝え合うことに重きを置いて指導することに努めた。学習に前向きに取り組む児童の姿が多く見られるようになった。児童の意欲を生かし、学習内容の定着を図っていくことが今後の課題として挙げられる。	児童が学びを楽しみ、よく分かることができる授業づくりを推進していけるよう、校内研究のテーマや指導の方向性を全教員が同じ認識のもとに研究できるようより具体的なものにし、学校全体として指導力の向上を目指していく。
2	地域の人材を生かした特色ある教育活動	昨年までの、生活科や総合的な学習の時間の校内研究を通して培った、地域の施設や人材とのつながりを活かした学習を展開した。	今年度は、地域の人材や施設との交流が活発にできるようになった。この貴重な体験が、児童の、地域を愛する気持ちを育てた。新たな交流先が開拓された一方で、ねらいがはっきりしない活動も出てきており、もう一度見直していく必要も感じている。	各学年で、今まで開発した地域人材・施設とのつながりをしっかりと検討し、ねらいを達成できる活動となるよう調整する。
3	個に応じた児童支援	学校生活の様々な場面で困り感を抱える児童について、学級担任だけでなく、学年の教員や支援教育コーディネーター（CO）など複数の目で見守り、より良い支援につなげるよう努めた。	別室登校の場を確保し、環境整備に努め、教室に入ることに抵抗がある児童の登校を促した。その結果、教室に登校できるようになった児童がいる。また、登校自体に抵抗を感じている児童に関しては、保護者も含めて巡回カウンセラーやSSWなど、専門知識を持つ人材に積極的につなげてきた。すぐには効果が表れないが、本人や保護者の安心につながっていると感じている。	別室登校児童については、支援教育Coを中心にしながらも、養護教諭や教務主任・教頭など、担任以外の教員が臨機応変に対応するような体制をとることが効果的だと分かってきた。来年度も引き続きそのような柔軟な体制で対応していく。
4	児童が安全で落ち着いた学校生活を送るための環境づくり	教室において落ち着いて学習に取り組めない児童については、取り出しや入り込みなどの支援ができるように、支援級とも連携して人員を配置することで対応した。	各クラスで困り感を抱える児童についての情報を、担任から支援教育COにすぐに上げて相談し、素早い対応ができるよう努めてきた。ただ、いつでも対応できる専用の教員はいないので、学年の教員での対応も含めて検討していく必要がある。	支援教育COへの情報集約とともに、学年の教員を中心としたケース会議の充実も図っていきたい。同時に、教職員の児童理解の幅を広げるための研修の機会を継続的に持っていく。 コロナ禍でのマスク生活の影響やSNSの利用の広まり等により、他者との関わりに自信がもてずにいる児童が増えてきている。本人の困り感が表面に現れにくい場合もある。支援教育COを中心に職員間や保護者間と連携して情報共有し注意深く見守る対応を引き続き行っていく。
5	学校の教育方針や子どもたちの様子の公開・発信	土曜参観2回を含む年間5回の授業参観、2回の懇談会、に加えて各学年の学習発表会を公開した。 学校教育説明会・報告会は、それぞれ6月、2月に行った。	学校教育説明会・報告会については6年生も参加し、運営委員会の児童を中心に、学校生活や行事などにおける児童の活躍を伝える場を設けた。 授業参観については多数の保護者に参加していただいたが、懇談会の参加者は少ない。	学校教育説明会・報告会が、6年生が学校のリーダーとしての自覚を持つ大切な場となっていた。引き続き参加させたい。 懇談会については、その内容を見直し、保護者にとって魅力的な機会にしていく。

6	実践的な防災訓練の実施	地震や火災、津波など、本校の立地場所において想定される災害に対応した訓練を行った。また、不審者対応訓練も形式を変え、2回行った。	あらゆるパターンの訓練を行い、「自分の命は自分で守る。」を合言葉に、児童の防災意識を高めてきた。特に、予告なし（児童だけ、教員も）の訓練も行い、教職員の瞬発力を鍛えることにも注力し	実際に日本各地で起きている災害は、想定を超えるものが多発している現状である。現状での川崎市の危機管理体制について研修する機会を作り、児童の意識だけでなく、教職員の意識も高める。

学 校 関 係 者 の評 価	今年度の学校運営のまとめ ・ 次年度へ向けて
学校が児童にとって安心して通える場所となることが、昨年度の学校評価アンケートから見えてきた課題であった。今年度の児童アンケートでは「学校生活が楽しいですか。」という質問に92.27%の児童が、保護者アンケートでは「学校は子供が楽しく安全に学校生活が送れるよう努めていると思いますか。」という質問に98.36%の保護者が、肯定的な回答をしていた。 本に親しむ環境については、児童アンケートの「本を読むことが増えましたか。」という質問には67.22%の児童が、保護者アンケートの「学校ではお子さんが図書に親しむ環境づくりを行っていると思いますか。」という質問に73.36%の保護者が、肯定的な回答をしていた。	コロナ禍の中で制限されてきた、入学式や卒業式、スポーツフェスティバルなど、大人数で集まる行事を再開できたことは、学校の教育活動にとって大きな進展となった。特に800名を超える児童数という本校のスケールメリットを活かし、人とかかわる良さを全面に打ち出した活動を展開できるようになったことは、今年度の大きな成果につながった。また、地域やPTAの教育力を活かした様々な新しい活動も始まっており、新しい視点からの教育活動の活性化の機運をを引き続き盛り上げていきたい。 また来年度は、児童の言葉の力をつけるために、家庭とも連携して読書に親しむ環境づくりに重点的に注力していきたい。言葉の力が増すことが、学力全体の底上げにつながっていくと考えている。さらに、防災対策に関しても引き続き教育目標の重点項目とし、最悪の被害状況を想定した上で、児童の命を守るにはどうしたらよいのかについて対策を練っていきたい。